

「イグアナ」

—初稿—

2025/10/06

〈人物表〉

辻田 和樹 つじた かずき
(29)

保険会社に勤める営業マン

藤木 美桜 ふじき みお
(26)

和樹の会社の後輩で、不倫相手

辻田 瑛子 つじた えいこ
(30)

和樹の妻

辻田 幹雄 つじた みきお
(72)

瑛子の父で実業家

平塚 義道 ひらつか よしみち
(60)

辻田の客

1.

ラブホテルの一室（昼）

辻田和樹（29）、スーツ姿でベッドに腰掛けながら、スマホを弄っている。

和樹 「そうだ。もうラインで送らないで。言ったよね？」

藤木美桜（26）、ブラウスのボタンを閉めながら、

美桜 「あー、ごめん」

和樹 「寝てる間とか見られるかもだし。このアプリだと履歴とか全部勝手に消してくれるから」

美桜 「……うん」

と、スカートを履きながら、気のない返事。

和樹、イラついて、

和樹 「聞いてんの？」

美桜、和樹の方を向いて、冗談めかしく、

美桜 「絶対私の方がいいと思うけどな」

と、顔を近づける。

和樹、美桜の頭に軽くデコピンして、笑う。

鞆を持って立ち上がり、

和樹 「早く服着て。外回り戻るよ」

美桜、恨めしそうな目でジャケットを羽織る。

2.

和樹のマンション・外観（夜）

湾岸部に位置するタワーマンションの高層階。

3.

和樹のマンション・リビング（夜）

夕食を囲む和樹と、向かいの妻・辻田瑛子（30）。

互いの皿にはナイフとフォークで食べるタイプの肉。

和樹、瑛子のグラスが残り僅かなのを見て、

和樹 「あ、飲む？」

と、ボトルを手に取る。

瑛子 「ううん」

和樹 「そっか」

和樹、笑顔を振り撒きながら、得意げに話し始めて、
「それでさ、その契約してくれたお客さんが、保険ってペ

ットにも掛けられますかって言うのよ」

瑛子、伏目がちに淡々と食べ進めている。

瑛子 「うん」

和樹 「だからさ、はいワンちゃん猫ちゃんのペット保険もござ
いますつつたら、こんなかいいグアナだって言うの」
と、瑛子に笑いかける。

瑛子、目を合わせず、表情は曇ったまま。

瑛子 「……うん」

和樹、真顔に戻って、

和樹 「え、さっきから、どうした？」

瑛子 「あのさ」

と、箸を置いて和樹を見る。

瑛子 「言わなきゃいけないことあって」

和樹、固まる。

瑛子、意を決して、

瑛子 「私、もう長くないんだって」

和樹 「え？」

瑛子 「あと半年だって」

4. 美桜の家・寝室（昼）

美桜、ベッドに寝転がってスマホをいじっている。

メッセージアプリには美桜の送った「おーい」「暇」

「返事しろ」などの文面。既読はついていない。

数秒経って、メッセージが自動で削除されていく。

美桜、スマホを閉じて、枕元に投げ捨てる。

5. 大学病院・待合室（昼）

瑛子と和樹、ベンチで黙って順番を待っている。

和樹、瑛子の手を握る。

瑛子 「大袈裟だって」

和樹 「大丈夫、セカンドオペニオンでひっくり返ることなんて
よくある」

瑛子 「……なんでそんな優しいの」

和樹 「当たり前だろ」

瑛子、笑って、

瑛子 「なんか意外」

和樹 「え？」

瑛子 「あのさ、正直、最近浮気してるのかと思ってた」

と、笑う。

和樹、眉ひとつ動かさず、

和樹 「馬鹿言うなって」

看護師、診察室から廊下に出てきて、

看護師 「辻田さん、辻田瑛子さん」

二人、手を握ったまま立ち上がる。

6.

大学病院・診察室（昼）

瑛子と和樹、診察室のモニターを前に手を繋いだまま座っている。

和樹 「……そうですか」

医師 「ええ。まずはこういった治療を選ぶか、ご家族でしっかり話し合われることをお勧めします」

和樹 「分かりました」

医師 「……辻田さん、どんな時でも希望は残っていますよ。念の為、CTだけウチでも撮ってみましょう」

瑛子、伏目がちに頷く。

和樹、ぎゅっと瑛子の手を握る。

瑛子、和樹を見る。

看護師 「検査こちらです」

と、瑛子に促す。

瑛子、手を離し、看護師の案内で診察室を出る。

和樹、医師に礼をして、瑛子に続いて部屋を出るか

と思いきや、踵を返し、

和樹 「あの、お伺いしても」

医師 「はい？」

和樹 「その、確かなんですか？ 半年というのは」

医師 「……ええ。推定にはなりますが」

和樹 「……具体的に何日後かってのは、分かりますか？」

大学病院・入り口（昼）

入り口のロータリーに走り込んでくる高級外車。
停車。運転手、降りて後部座席のドアを開ける。

辻田幹雄（72）、出てくる。

瑛子と和樹、ちょうど病院から出てきて、

瑛子 「お父さん」

と、幹雄を見て驚く。

和樹、ゲツという顔の後、繕うように幹雄に会釈。

幹雄、二人に駆け寄る。

瑛子 「なんで」

幹雄 「知り合いに聞いたんだ」

瑛子 「ごめん、隠してたわけじゃなくて」

幹雄 「馬鹿野郎」

と、和樹の胸ぐらを掴んで、怒鳴りつける。

幹雄 「どうしてお前がいてこんなことになったよ」

和樹 「……すいません」

幹雄 「お前な、辻田の人間になったって自覚が足りねえんだよ。
女一人守れねえでどうすんだよ。馬鹿か」

和樹 「……はい」

幹雄 「馬鹿か」

と、平手打ちする。

和樹、力なく項垂れている。

病院に集った人々の視線が集まっている。

瑛子 「お父さん、やめて。みんな見てる」

幹雄、手を離す。

和樹、膝から崩れ落ちる。

幹雄 「瑛子、乗りなさい」

瑛子 「え？」

幹雄 「こんな男と暮らしてるから体が悪くなるんだ。すぐ直る。
一度帰ってきなさい」

瑛子 「……はい」

瑛子、後部座席に乗って、和樹を見下ろす。

車、走り出す。

雲一つない青空。

和樹、深呼吸。車の走り去る音。

和樹、ゆっくり両手を広げ、もう一度深呼吸。空を見上げて、和やかに笑う。

和樹の笑いが、高らかな声へと変わっていく。

8. 平塚の自宅・外観（昼）

邸宅を囲う石造りの外壁。3メートル以上あろうかという高さ。

9. 平塚の自宅・リビング（昼）

広大なリビング。

その一角に置かれた自動販売機くらいの大ささの透明なケージ。中で1・5メートル級の巨大なグリーンイグアナが木によじ登っている。

スーツ姿の美桜、ケージの前でイグアナを見ている。

美桜 「可愛いですね」

平塚義道（60）、少し離れたところでソファに座っている。

平塚 「辻田さんちのとはまた違うだろ？」

和樹、平塚の横に並んでいて、

和樹 「……ええ」

10. 幹雄の自宅・リビング（昼）

広大なリビングの一角には、巨大な水槽。

幹雄、中で泳ぐ無数の金魚に餌を与えている。

勢いよく喰らいつく金魚たち。

瑛子、ソファに座って、俯いている。

幹雄、金魚の様子を見て、笑う。

11. 平塚の自宅・リビング（昼）

和樹と美桜、テーブルに書類を広げている。

美桜 「保険をお掛けになりたいというのわかります」

平塚 「金が惜しいんじゃない。愛情をかけてやりたいんだ」

美桜 「ええ」

イグアナ、木の葉をはんでいる。

和樹、書類の説明に戻って、

和樹 「この特約は、ご病気が発覚する前のご契約でしたら、何も心配ございませんという意味です。万が一、後に何か分かってても、それは不慮の事故と同じ扱いです」

平塚 「ああ、じゃあ人間の保険と一緒にだ」

和樹 「左様でございます」

12. レストラン・外観（夜）

ホテルの高層階に位置するレストラン。

13. レストランの一室（夜）

和樹と美桜、グラスをカントと鳴らして乾杯して、

和樹 「誕生日おめでとう」

美桜 「また誤魔化されるかと思ってた」

和樹 「な訳ないだろ？」

階下からは東京の街が一望できる。

美桜 「今度、和樹と旅行行きたい」

和樹 「んー？」

と、グラスを口に運ぶ。

美桜 「また誤魔化す」

和樹 「誤魔化してないよ」

美桜 「じゃあ、海外行こ。ヴェネツィア」

和樹 「……いいよ」

美桜、驚いて、

美桜 「本当？」

和樹 「うん。でも、半年後ね」

と、笑う。

美桜、呆れた顔でグツとグラスを飲み干す。

（終わり）